

直方ミニバスケットボールクラブだより

次代を生きる子どもたちが身につけておきたい力

めざす方向性が一致してれば、かかわる人は多様な方がいい。それぞれの個性、特性を生かして多様なアプローチができることは、子どもたちが社会性、コミュニケーション力を高めるうえでとても重要です。

自分と違うところがある、自分の意に反するところがあると、相手を認められなくなる、うまくつきあえなくなるというのは、社会に出る際のハンディになりかねません。点数学力だけでは、うまくいかないケースはたくさん目にしてきました。子ども時代から、多様な人と出会い、つながり、コミュニケーションしていく力は、学校や地域の多様な活動で身につけていくことができます。

指導スタッフも多様

そのことは、私たちおとなも同様で、むしろ私たちおとながモデルになって子どもたちに示すべき課題とも言えます。

たとえば、今年度の直方クラブのコーチは、Aコーチ、Bコーチ、Cコーチの3人に携わってもらっています。

Aコーチは、一人ひとりの子どもに個別に「いねいなかかわり」をもってくれます。個々の子どもに投げかける私からの注文や指摘にうまく答えられなかったり、理解が進んでいないようすをみてとると、必ずフォローしてくれています。

Bコーチは、指導スタッフのなかで唯一、コーチライセンスと審判ライセンスをもって来ています。ここ2年は、「コロナ禍」でほとんど大会が行われていませんが、大会への参加の場合、チームにこのライセンスをもった指導者が必要です。ルール変更の情報や子どもたちが行うオフィシャルの仕方等に詳しく、新しくかつ正しい情報を、子どもたちの指導に役立てて来ています。

Cコーチは、今年度からですが、とても明るく元気なキャラクターで子どもたちの指導にあたってもらっています。これまでなかなか声を出すことのできなかつた子どもたちが、声を出すことで「こんなに元気が出るんだ」「こんなに楽しくなるんだ」ということを実感していると思います。私からきびしく迫られた後も、さっとスイッチを切り替えるように声を出して、子どもたちの背中を押して励まして来ています。

三者三様、一人もキャラがかぶってないのがいいですね。それぞれ違うのがいいです。それぞれが、それぞれにはなれません。自分のもち味で、子どもたちにかかわってくれることが有効です。そして、スタッフどうしも、互いの個性や特性を認めたいうえで、「違い」を「よさ」として生かし合っていくことが重要です。それぞれのもち味

が発揮され、子どもたちに多様なかかわりをもってくれることで、子どもたちは多方面からの多様なアプローチで、幅広く総合的に学ぶことができます。めざす方向性が一致してれば、アプローチの仕方はそれぞれの特性、個性を生かしてかかわってもらえればOKです。むしろそれが望ましいことです。

めざす方向性がばらつくときは、一緒にはできません。とことん勝つことにこだわりたいコーチ、そのために子どもを追い込んででも...というコーチと、小学生のスポーツクラブには勝つことよりも大切なことがあると考えているコーチが同じクラブで指導すれば、うまくいかなくなるのは必然です。過去に、このような考え方、めざす方向性、価値観などの違いから、うまくいかなかったケースをいくつも見てきました。そうなると、結果として、子どもも、指導者も、保護者も、ともに苦しむこととなります。そのような状況にだけはしてはならないと、いつも気にかけてながらクラブ全体をコントロールしています。

子どもたちも多様

子どもたちにも、さまざまな個性、特性を持った子どもたちがたくさんいます。一人ひとり違います。保護者のみなさんも同様に多様です。しかし、めざす方向性だけは一致させて、子どもたちの直方クラブでの活動を継続してもらっています。そのなかで、子どもたちが自らをきたえ、チームになっていく過程を、階段を一段一段踏みしめるようにあがっています。

子どものことですから、時には転げ落ちそうにもなりますし、実際に転げ落ちることもあります。しかし、そこからまた自分で立ち上がりのぼり始めることができる子どもを育てたいですね。転がり落ちてただじっと助けを待っているのではなく...。だまってじっとしていれば、いつも家の人が出てくれるということではなく、自力で立ち上がる努力をしたり、立ち上がれなくても自分で助けを求めたり、自らが何らかの行動を起こすことが重要で、それが教育界で、いわゆる「生きる力」と言われ重要視されているものです。

この力を身につけるには、日常生活のなかにある小さな一つ一つのことから、自分のことは、「自分で考える」「自分で選ぶ」「自分で判断する」「自分で決める」「自分で言える」「自分で行動する」などを習慣づけることが重要です。もちろんその過程に「相談」「協力」「助け合い」などという段階が入ることは拒むことはありません。むしろ大切なことです。しかし、最後は「自分で決める」ことが重要です。

親に進められて力関係のなかで自分の意志を表明することができなかつたり、親に決めてもらうことに慣れてしまって自分で決める感覚をもてていなくなつたりする場合があります。この場合、いま一時的にうまくいったとしても、先々うまくいかなかった場合、子どもが親を責めるというケースにも何度となく出会ってきました。

これからの時代を生きる子どもたちが身につけておかなければならない力として、「自律と自立」「自己選択と自己決定」「積極的依存と自己解決」「自主性と主体性」「対話とコミュニケーション」などがあげられています。そして「多様性と共生」を

軸とした社会創造の重要性がさげばれています。

次へのステップのために

子どもたちは、環境が変わると何かにつけてとまどいがあるものです。いつもと違う状況になったとき、つまり決まっていることと違う状況になったとき、6年生のリーダーシップが試されます。

先日、6年生をはじめ、すべての子がいつもと違う状況に気づくことができず、必要な注意喚起が行われなかった場面がありました。このところ少し気になり始めていたことでもあり、また次の段階に進むうえで必要な力でもあり...と考え、活動にブレーキをかけました。

「バスケットはだれかにさせてもらってるんじゃない。自分たちでしてるんだろ。そのためには、ぼうーっと体育館に入ってきて、決まったことだけをして開始時間を待つということではなく、さまざまなことに気をくばり、必要な指示を出し、注意喚起をし、活動が円滑に進むように力を発揮していく、それが6年生の役割だろ」ということをつきつけました。「6年生は5年生、4年生...とはちがう。6年生として、うまく活動を進めるために常にまわりの状況を気にかけて必要なことを指示していかなければならない」と。

毎年このようなきびしいつけをする場面は必ずあります。それが今年はこの日でした。

7月はじめの練習の際、私が行くまで練習を見守っていただいていたお母さんから、「すごいですね。先生が来られてなくても、6年生がしっかりリードして、みんなちゃんと活動できてるんですね」と、おほめのことばをいただきました。そのことは、その日のうちに子どもたちに伝え、6年生のリーダーシップと全員の活動を評価しました。

確実に力をつけ成長していますが、まだ十分ではありません。まだ先があります。次のステップに進むために、さらに力をつけてもらわなければなりません。

今回のことは、来年、1年間をふりかえったとき、一つの節目の日になっていると思います。この日の失敗を失敗で終わらせない、この失敗が無駄ではなかったと言えるように、夏休み、しっかりきたえて、強くてやさしい、たくましくてやさしさをもった子どもたちへと、さらに成長を促していきたいと思います。